

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 30 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25420668

研究課題名(和文) ランドスケープ概念を方法とする歴史的都市・町並みの評価及び保護手法の検証

研究課題名(英文) Reconsideration of Preservation Methods on Historic Cities and Townscapes from the Point of View of the Concept Landscape

研究代表者

清水 重敦 (Shimizu, Shigeatsu)

京都工芸繊維大学・その他部局等・准教授

研究者番号：40321624

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、歴史的都市・町並みの中でも基礎情報の蓄積が進んだ伝統的建造物群保存地区制度を対象に、「ランドスケープ」概念を導入して地区の読解方法を検証し、都市分析の新たな方法論を構築することを目的とする。

ランドスケープ概念からの町並みの再読により、町並みの自己同一性を保つ骨格としての地形・地質から町並みの持続性をとらえる視点、変化する町並みに一定の法則を見いだすことにより、各時代の要素が共存する町並みに価値を見いだす重層性、スケールの異なるもの同士の関係性を見いだすことにより町並みを構成する諸要素の間に一定の関係があることを示す一体性、といった、概念が抽出された。

研究成果の概要(英文)：This research aims to build a new method for urban analysis by reconsidering the reading of preserved areas of groups of historic buildings (Denken-chiku) through the concept of 'landscape'.

Through this research, 3 new viewpoints are found: 1.The sustainability of townscapes from topography and geology. 2.Evaluation of multi-layer of townscapes from finding a law of change. 3.Integrity of diverse elements, especially the relationship between things which has different scales.

研究分野：建築史・意匠

キーワード：文化的景観 伝統的建造物群 ランドスケープ 町並み 生業

1. 研究開始当初の背景

伝統的建造物群保存地区制度(以下「伝建制度」、「伝建地区」と略記)により牽引されてきた歴史的都市、町並みの保全は、近年の文化財保護法における「文化的景観」の創設や「歴史まちづくり法」の公布により、手法が多様化し、活発な様相を呈しつつある。しかし、逆に制度相互の評価及び保護手法の差異も目立つようになり、基本的理念が混乱しかねない状況となってきた。このことは、各制度に基づく手法が絶対的なものではなく、目的を絞った限定的なものであることをあらわにしてきている。

35年以上の歴史を持ち、制度として成熟している伝建制度も、近年の状況の中で、次のような問題を露呈しつつある。歴史的変化を経て到達したクライマックスの状況を保存する、という考え方ゆえに、現在への連続性に難点があること。都市と建築といったスケールの異なる要素間の関係をとらえる方法が未成熟であり、価値評価、保護施策ともに、都市と建築の間が乖離していること。

町並みと伝統的な住民生活とを切り離してモノの保存に特化することで、制度を使いやすいものにしてきた経緯があり、建造物群と伝統的な生活・生業との乖離が見られる地区もあること。

一方、学術的状況についてみると、保全を前提にした個々の町並み、文化的景観の調査は積み重ねられてきているものの、それらを統合的にとらえ、到達点を示した研究は数えるほどしかない。しかもその中心的推進者であった宮本雅明氏の逝去により、研究の停滞が危惧される。

筆者は、複数の伝建調査を手がけてきた経

験を踏まえつつ、ここ4年間ほど、都市の文化的景観の調査研究に取り組んできた。都市の文化的景観の評価と保護手法の検討には、建造物群等の有形要素だけでなく、無形要素を含む、地域を構成する要素全体とシステムの分析、特に町並みにおける新築誘導の方向性を定めるための価値評価のあり方、において、伝建とは異なる視点が必要となる。

2. 研究の目的

伝建と文化的景観には、かように価値の置き所と保護の考え方に差異があるものの、扱う対象は重なっており、両者の調査を経験してみると、むしろ相互補完的な関係にあるものと考えられた。しかし、不幸なことに、文化財保護施策としては相互に関係を持たされずに別々に取り扱われているのが現状である。伝建と文化的景観の親和性を考えれば、両者を横断する視点により都市・町並みを読み解くことで、研究上も保護の実践上も新たな展開を得られるものと思われる。

そのためのキーワードとして筆者が設定したいのが、「ランドスケープ」概念である。これを漢字の「景観」ではなくカタカナで表記するのは、語の原義に立ち戻り、見える景観ではなく見えない景観、すなわち結果として表れている物理的景観よりも景観を作り上げる仕組みを重視する、近年の文化的景観研究の中で意識されるようになった方法的視座を強調したいがためである。筆者は、都市の文化的景観調査を実施する中で、「ランドスケープ」概念から都市を読解する方法として、次の3点を重視するに至った。

持続性：変わらずに持続する骨格を見出すこと

重層性：史的变化に一定の法則を見出すこと

一体性：スケールの違う要素間の関係性を見出すこと

このアプローチは、まさに、伝建制度が抱えている上記の問題点に解決を与えるものになっていると考える。この概念を用いて、既往の歴史的都市・町並みの評価及び保護手法を検証するところから始める必要がある。

本研究では、歴史的都市・町並みのうち、すでに基礎情報の掘り起こしがなされ、一定の価値評価がなされている伝建地区に的を絞り、基礎情報の再読と現地調査を通し、その価値評価と保護手法を検証していく。具体的には以下の諸点を明らかにする。

「ランドスケープ」概念に基づく都市分析方法論の設定

伝建地区における上記都市分析方法論の有効性の実証

以上を踏まえた歴史的都市・町並みの新たな保護施策の提案

3．研究の方法

全国の都市・町並みに関する伝建地区を対象に、ランドスケープ概念に基づく再読をおこなう。以下の3つの項目に分けて研究を実施する。

基礎的情報収集・分析

既発行の伝統的建造物群保存対策調査報告書、文化的景観調査報告書を収集、読解し、分析のための方法を整理する。

具体的には、各調査報告書の章立て、叙述項目を一覧表化し、それぞれの叙述の強弱を分析するとともに、ランドスケープの観点から関わる、持続性、重層性、関係性の各観点か

らの分析の有無を検証する。この観点が不足しているものについては、分析の糸口を、報告書掲載情報を元に検討し、現地調査に備える。

一次調査

全国の都市・町並みに関わる伝建地区のうち、筆者がすでに調査を進めている北部九州5地区（秋月、八女福島、黒木、筑後吉井、豆田）や筆者が保存対策調査や審議会に関与したものを除く地区を現地調査し、ランドスケープの観点からの読解可能性を検証する。

調査は、可能な限り各自治体担当者の同行を求め、ディスカッションをおこないながら、地区全体を踏査し、分析の糸口発見に努める。

二次調査

で実施した一次調査より、ランドスケープの観点からの読解に親和性のある地区を選び、自治体担当者に同行を願った上で、二次詳細調査を実施する。

具体的には、既往調査の成果を基にしつつ、地形・地質・インフラ、都市構造等の史的变化、都市と建造物あるいは建造物同士の関係性、の各項目を実地に調査し、記録、分析していく。

4．研究成果

研究の実績

平成25年度は、研究の全体像を明瞭にするための基礎的情報収集と分析をおこなうとともに、九州地方の重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）の現地調査を実施した。

基礎的情報収集・分析として、研究室所属の大学院生とともに「文化的景観ゼミ」を組織し、九州及び中国地方の伝建地区につき、既発行の伝統的建造物群保存対策調査報告書

を収集、読解し、現地調査のための視点と方法を抽出した。具体的には、各調査報告書をランドスケープの観点、すなわち主に風土及び生活・生業との関係から読解し、この観点の叙述の過不足につき検証した。また、より概念的な部分に関わる持続性、重層性、関係性の各観点からも、叙述を検証した。

現地調査は、九州地方の伝建地区のうち、佐賀県に所在する鹿島市浜庄津町浜金屋町・浜中町八本木宿、嬉野市塩田津、有田町有田内山を対象に実施した。3地区とも、自治体の伝建地区担当者に同行を依頼し、ディスカッションをおこないながら地区全体を踏査した。具体的には、地形・地質・インフラ、都市構造等の歴史的变化、都市と建造物あるいは建造物同士の関係性、の各項目を調査し、各地区の特性を読解した。

平成26年度は、前年度の成果を踏まえつつ、4月開催の建築史学会大会において、シンポジウム「町並みか景観かー町並み・集落・都市・景観保存の現在と建築史学」の企画と運営を行った。このシンポでは、これまで建築史分野では伝統的建造物群保存地区の調査及び保存活用に関わるが多かったが、新たに文化的景観という文化財範疇が登場したことにより、建築史だけでなく都市史や他分野との共同により町並みを景観としてとらえることでまちづくりの可能性と建築史研究者の活動領域の拡大が期待されることが議論された。

現地調査としては、中国地方の重要伝統的建造物群保存地区(伝建地区)のうち、大田市の大森銀山及び温泉津、倉吉市の打吹多摩川の三地区につき、現地調査を実施した。3地区とも、自治体の伝建地区担当者に同行を依

頼し、ディスカッションを行いながら地区全体の地形・地質・インフラ、地区の生業、都市と建造物の関係、特にファサードに現れる特性、といった諸項目を調査した結果、伝建地区の再読の可能性を強く認識することができた。とりわけ、大森銀山における生業と建造物ファサードの関係、温泉津における敷地背後の凝灰岩傾斜地の利用、打吹玉川における生業と河川利用の関係につき、新たな知見を得ることができた。

平成27年度は、年度前半に国内の伝統的建造物群保存地区のランドスケープ概念からの再読(二次調査)を行い、年度後半には大学業務により派遣されたアメリカ合衆国コロンビア大学の所在するニューヨーク市において、同市における町並み保存の実態調査を行い、日本における町並み保存との比較研究を行った。

国内の伝統的建造物群保存地区の再読は、昨年度実施した倉吉市打吹玉川地区を対象に、町家のファサード形式の再整理、水路形式の読解を中心に、町並みの再読を行い、都市史と生業のあり方を重ね合わせることで、町並み保存への新たな視点の提示を試みた。

ニューヨーク市の町並み保存については、マンハッタン島内に51箇所設けられているHistoric Districtを現地視察した上で、町並み保存の制度運用、保存地区における新築建物のデザイン方法につき、事例収集と分析を行った。

成果の分析

本研究で得られたランドスケープ概念を通して見た町並みの再読につき、方法的視座に焦点を当ててまとめておきたい。

ランドスケープ概念から都市・町並みを見る際に強調される視点として、本研究では持続性、重層性、一体性を挙げた。これらの視点ごとに、分析内容をまとめていこう。

の持続性は、町並みを常に変化を重ねていくものと捉えた際に、その中でも変わらずに持続する骨格があり、それこそが町並みの自己同一性を担保するものであるはずだ、とする考えに基づく。その骨格となるのが地形・地質・水系である。この要素は町並みの成立根拠としては当然考えられるべきものであるが、その特性をいかに形作るのかという視点は意外なほど注目されていない。

温泉津の町並みでは、石見銀山の積み出し港としての役割を持ちつつ、谷筋の奥に温泉が湧いており、谷筋を埋めるように両者を繋ぐ町並みが形成されている。積み出し港に起源を持つ廻船問屋等の並ぶ町並み、温泉場の町並み、両者を繋ぐ町並みが、それぞれの性格を持ちつつ全体を形成しているわけだが、3者がいかに一つの性格を持ちうるのか、あまり考察が深められているように思われなかった。

そこで注目したのが、この地区の地形・地質である。町並みの背後に迫る丘陵は凝灰岩質のいわばからなり、この地区の町家は敷地背後の山を削って室を造っていることが多い。温泉の湧く地区ではこの凝灰岩質の岩から温泉がしみ出しており、洞窟を掘って風呂にしている箇所もある。寺院では岩場を削りだして墓地を区画している。つまりこの地区は比較的軟らかい凝灰岩質の丘陵を積極的に使っている点に一つの特徴を持っている。

ただ、これはあくまでも敷地奥の部分であり、都市の表側には現れてこない。しかし、注意深く見ると、いずれの家や墓地でも、室を削り出すだけでなく、そこからし

み出る水を処理するための溝を丁寧に彫り、水を誘導していることが見いだされた。これらの水はいずれも敷地境を通して表通りの側溝に排水されている。の排水溝がほとんどの家の敷地境に顔を出しているのである。都市に顔を出さないとされた凝灰岩を削りだした室は、家と家との間にわずかに顔を出していたことになる。

温泉津の町家は、時代や生業ごとに異なる表情を見せ、一貫した特徴を見いだしにくいのであるが、その特徴は地形・地質に規定されるこうした部分に見いだされるべきであることがここにかがえた。

の重層性は、史的变化に一定の法則が見いだされるであろうことを想定している。この点については倉吉の町家のファサードに関して検討を行った。

倉吉の町家は、町並み調査において一階の庇を支持する腕木に特徴があることが指摘されている。時代ごとに造形的特徴を持つ腕木のデザインが悉皆的に収集され、倉吉の町家を個性づける要素としてクローズアップされるようになってきた。この腕木をよく見てみると、主体部との取り付け高さや納まりに多様性があることに気付いた。これを詳細に見ていくと、時代の古い物は取り付け高が高く、新しいものは比較的低くなっていることがうかがえた。町家の二階の高さが、近世には低かったのが、近代に徐々に高くなっていくことと逆の傾向が見られることになる。この理由については想像の域を出ないが、一階の庇高は、庇下空間の利用と密接に関連するものと思われることから、地区の生業における庇下空間の利用形態の変化がここに対応するのではないかと、ということが想定される。

町家の特性を分析する方法は多種多様に開発されているが、時代によるファサードの変遷は、二階高さの変化と細部の造形の変化、という点に考察が集中しており、そ

の意味の考察が深められていないように思われる。倉吉におけるこの考察は、町家のファサードの変遷に生業のあり方を重ね合わせて分析する可能性を示しているように思われる。

の一体性は、町並みを構成する諸要素の間に一定の関係が存在するであろうことを想定している。とりわけ地形と建築、都市インフラと建築といったスケールの違うもの同士の関係性がこうした視点にとって重要となる。先に論じた温泉津における地形、建築、都市インフラの関係は、この視点からも意味を持ちうる分析と考える。温泉津以外の町、例えば塩田津、有田などの町でもこうした視点からの分析が可能になると思われるが、これについては今後も継続的に分析を続けていく予定である。

以上、本研究を通して、ランドスケープ概念から都市・町並みを再読することの有効性を確認することができた。この方法的視座が既往の視点と異なるのは、それが都市・町並みの価値評価に留まらず、その保存再生のあり方に新しい方法をもたらすものだ、ということにあらう。都市・町並みは建造物のみで構成されているものではなく、また環境を形成する諸物件や都市インフラだけで構成されているものでもない。それらがお互いに関係を持ちつつ、またそこに暮らす人々の生活があって初めて成り立つものである。本研究の視点は、こうした視点に立った町並み保存のあり方を提言する出発点を提示するものであると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

清水重敦「ランドスケープとして見る都市遺産-『都市遺産の保存研究』が開く展望」『町並みの解読から都市・建築遺産の保存再生

へ』2013、pp.10-21

清水重敦「見えない景観-文化的景観が開く建築・都市への視座」『建築雑誌』1654、2014、pp.28-29

清水重敦「文化的景観の視点から見た町並みの読解とその保全」『建築史学』63、2014、pp.36-43

〔学会発表〕(計 2件)

清水重敦「文化的景観の視点から見た町並みの読解とその保全」シンポジウム「町並みが景観か-町並み・集落・都市・景観保存の現在と建築史学」(建築史学会) 2014年4月

清水重敦「日本における町並み保存の特異性-ニューヨーク市の歴史保存との比較を通して-」日本における建築の保存と再生(フランス極東学院京都センター連続セミナー) 2016年3月

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

清水重敦 (SHIMIZU, Shigeatsu)

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・准教授

研究者番号：40321624

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし